

## ひさぐ野宿者、もがく野宿者——地位隔離と意味世界

### 課題の設定

経済のグローバル化が世界を席捲し、「新しい」野宿者(1)が可視化し、「新貧困層」が現われた(青木,2003)。なにが「新しい」のだろうか。その問いは、現代資本主義の理解の基本に関わる。「野宿者問題」が社会的に構築され、その研究も蓄積されてきた。野宿者問題は、搾取、差別、排除から市民性(civility)、公共空間、社会運動に及ぶ、現代社会の多様な問題を提起している。だれが野宿者になるのだろうか。野宿者はどのような人々なのだろうか。野宿者はどこへ行くのだろうか。野宿者研究において、今、主題の特化が進んでいる(2)。「新しい野宿者」を鍵概念とする国際比較研究も始まっている(3)。では、野宿者のナショナルな特質はなにか。その問いは、各国の経済・社会構造の理解の基本に関わる。

アメリカでは、1980年代以降、かつての中・高齢の白人男性を中心とするホームレス(skid rower)と異なる、性・年齢・エスニシティが多様化された「ニュー・ホームレス」が増加している(Livingston,2004:108,392)。発展途上国の大都市(マニラ、サンパウロ)では、1990年代以降、スクワッター(「不法」占拠居住者)にも住めず、街頭の寝ぐらを日々移動するホームレスが増加している。旧社会主義国の大都市(ワルシャワ、プラハ)では、社会主義から資本主義へ移行し、新自由主義が浸透するなか、ホームレスが現れている(4)。日本では、1990年代以降、かつての、労働現場と街頭を往復する建設日雇労働者／一時的野宿者と異なる、街頭に滞留し(地位隔離され、後述)、自前のしのごで生きる常態的野宿者が増加している(街頭と労働現場を往復する者は、今や少数派である)。これらはすべて、経済のグローバル化の産物であり、各国にみる現代資本主義の表徴である(青木,2000:序章)。

このような時代趨勢を念頭に、本稿は、日本の野宿者について3つの課題を設定する。一つ、日本の野宿者の全体像を俯瞰する。もって、本稿の主題追究の前景となす。データは、厚生労働省が2003年に全国の野宿者について行なった調査の報告書(以下、全国調査)による(厚生労働省,2003)(5)。二つ、大阪(市、以下同じ)の野宿者を対象に、彼らの野宿生活に入る前と後の仕事について分析する。野宿者は家のない(home-less)人々である。家がない原因はさまざまである。その内もっとも重要な原因は、仕事である。仕事は、住居の有無と選択を決定する。ゆえに本稿は、野宿者の〈仕事〉に焦点を絞る。そして野宿(化)過程、つまり、都市底辺への地位下降(落層)〔「いかにして野宿者になったのだろうか」〕と地位隔離〔「なぜ野宿生活を脱出できないのだろうか」〕の過程を分析する。ここで地位隔離(status segregation)とは、ある地位を他の地位から切断し、そこに固定化させる力または状態を指す。データは、大阪市立大学都市環境問題研究会が、1999年に大阪の野宿者672人に対して行なった調査の報告書(以下、大阪調

査)による(大阪市大,2001)。三つ、野宿者の意味世界、つまり、彼らが見ずからの境遇と運命をどう捉え(definition of situation)、どのような自己像を抱き、どのような願いをもち、どのような行末を見ているのかを分析する。もって彼らの、野宿生活の受容と拒絶の力学を描写する。データは、大阪調査の聞き取りの原資料による(6)。

## 1.日本の野宿者

日本の野宿者(問題)は、日本の経済・社会構造のなか、外国と異なる特徴をもっている。たとえば、アメリカ25都市の報告によれば、ホームレスは、2000年に60万人であった(ロサンゼルス6万人、ニューヨーク3万人など)(National Coalition for Homeless,2001.6)。この内、単身男性が過半数を占めるが、子どもを含む家族ホームレス(中心はシングルマザー)が36%に及ぶ。ホームレスになる原因には、低賃金(貧困)、高家賃(住宅)、精神疾患(福祉)、家庭内暴力などがある。ここで精神疾患とは、ほとんどがドラッグ乱用者やアルコール依存症者で、福祉財源の縮小とともに施設を出された(脱施設化した)人々が中心を占める(7)。また民族構成では、黒人や中南米出身者が多数を占める(Livingston,2004:108,392)。これに対して、日本の野宿者はアメリカと異なる。日本の野宿者に、ドラッグ乱用者はいない。アルコール依存症者も少ない。脱施設で野宿者になった人もいないか、いても少数である。民族的にもほぼ同質で、外国人はごく少数である。さらに日本の野宿者の特徴を、厚労省の全国調査によって俯瞰すると、次のようになる(8)。

### 1 人口が少ない。

2003年に、全国581の自治体で2万5296人の野宿者が、街頭・公園・河川敷・駅舎(以下、街頭で一括)で目視された。これは、(若干の集計方法の違いはあるが)2001年の全国調査より1206人多く、微増している。都市別では、大阪の6603人を最多に、東京6361人、名古屋1788人、川崎829人、福岡607人、横浜470人、北九州421人、神戸323人などが続く。野宿者は、大都市から地方都市に拡散する傾向にある。5大都市(東京、川崎、横浜、名古屋、大阪)で全国の野宿者の61.7%を占めるが、これは2001年の9.2%減である。しかし、施設(シェルターを含む。以下同じ)に入所した野宿者を含めると、数は大都市でも増加したと思われる。大阪で2057人減少したが、その減少は施設入所のためと思われる(9)。東京では、多くの野宿者が施設に入所したにもかかわらず327人増加した(10)。野宿者を支援する各地の活動家は、厚労省のカウントは正確でなく、実際は野宿者はもっと多いとみている。

しかし野宿者の暗数がどうであれ、それでも外国と比べて、日本の野宿者は多くない(11)。ただしそれは、日本で野宿者問題が小さいことを意味しない。野宿者が市内に拡散し、公園や河川敷で集住し、若者の野宿者襲撃が頻発し、野宿者に関わる事件が頻りに報道されてきた(たとえば、1980年の新宿浮浪者バス放火事件、83年の横浜浮浪者殺傷事件、95年の道頓堀ホームレス殺人事件、96年の新宿西口強制撤去、98年の新宿西口テント村火災事件など)。

そのなかで野宿者が可視化し、その存在が社会問題として認知されていった。その結果 2002 年に、国会の超党派による「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（ホームレス自立支援法、10 年の時限立法）が制定されるに至った。「国民」2.5 万人の貧困救済のための特別立法など、異例のことである。

## 2 ほとんどが男性である。

野宿者の性別構成は、男性 81.7%、女性 3.0%であった。不明が 15.4%あるが、これは、目視調査のため、防寒具を着込んだり、暗く奥まった所にいるなどで、性別が確認できなかったものである。そのほとんども男性と思われる(12)。近年、女性野宿者は増加傾向にある。しかしそれでも、女性野宿者は「量的には顕在化していない」（文,2004,p.54）。これは、困窮女性の多くが、野宿者になる前に、屋内労働に就いたり、施設に保護収容されていったことによる(13)。実際、施設に入った女性に元野宿者は少なくない(14)。この事情から推して、女性野宿者はもっと多いと思われる。

## 3 ほとんどが単身者である。

全国調査は、野宿者の目視調査と同時に、2163 人の野宿者（男 2014 人、女 101 人）に対して質問紙調査を行なった。それによると、「一人で」野宿する者が、全体の 77.3%であった。これに、「友人・知り合い（といっしょにいる）」「その他」を入れると、94.7%に及んだ。他方、「配偶者（内縁を含む）」「子ども」「その他の親族」とともに野宿する者は、5.2%であった(15)。また、「この 1 年間で家族・親族と連絡」を「とった」者は 22.9%に留まった。そもそも野宿者には、家族がなかった人、家族形成が困難だった人、家族と死別した人、家族を離脱した（させられた）人が少なくない。東京の一時保護センターの調査によれば、利用者（918 人）の出身家族で、扶養者が父だった人が 86.5%、母だった人が 9.5%、その他が 4.0%であった（特別区人事・厚生事務組合,2003:58）。さらに全国調査で、結婚歴のない人が 46.8%であった。結婚歴のある野宿者も、妻子との離婚・離別・死別を経て、単身の野宿生活に至った(16)。人は、「相互関連的な社会構造のネットワークに人々をリンクさせるような止め具をもたない」（岩田,1995:17）から野宿者になる。セイフティ・ネットでもっとも重要なものが、家族である。野宿者になって、家族から出入りを禁止された者が少なくない。これも、日本の野宿者の特徴である。野宿者は野宿生活を恥じ、家族は身内の「浮浪者」を恥じる。それほどに野宿者への烙印は強く、野宿者と家族を鋭く切り裂いている。家族へ戻る野宿者はごく少数と思われる(17)。

## 4 ほとんどが中・高年齢層である。

野宿者の年齢構成は、30 歳未満 4.5%、40 歳代 14.7%、50 歳代 45.5%、60 歳以上 35.4%であった。50 歳以上が全体の 80.9%で、平均年齢は 55.9 歳であった。1999 年の東京の野宿者の平均年齢が 54.0 歳（都市生活研究会,1999:12）、2001 年の名古屋の野宿者が 57.5 歳（基礎生活,2001:19）、1999 年の大阪の野宿者が 55.8 歳（大阪市大:14）であったから、すべての調査で、調査年のずれを越えて、平均年齢が 50 歳代半ばに収

まっている。つまり、この年齢層を境に、死んでいく者と新たに参入する者の野宿者の世代的分岐が進んでいる(18)。別の質問によれば、はじめて野宿して「5年未満」の人63.1%、「5～10年未満」人22.1%であった。つまり50歳前後に、若くても40歳代後半に野宿生活に入った者が、全体の8割を超える。50歳代後半というと、建設労働などの重労働に就労してきた野宿者には、すでに「老齡」期に入る。野宿者への生活保護支給の年齢制限は、大方の自治体で65歳である（横浜・寿町は60歳）。野宿者にとって、50歳代後半はもっとも苛酷な年齢層である(19)。

全国調査には現れていないが、近年、高校や中学校を離脱し、また家出をして公園などで野宿する若者が現われている。18歳（高卒時）未満の若者を子どもと見なすとすれば、日本にも子どもの野宿者がいることになる(20)。しかしその数はまだ少ない。

#### 5元建設労働者が最大グループをなす。

直前職（野宿者になる直前に就労していた仕事）で、建設労働者（土工や職人）であった者が全体の過半数（55.2%）を占めた。これに隣接職種（「労務・運搬作業員」「清掃作業・廃品回収」）を加えると、61.2%になる。また、建設業に特化された日雇労働者の集住地区・寄せ場（山谷、寿町、笹島、釜ヶ崎など）で求職・就労した経験をもつ野宿者は50.6%であった。さらに、最長職（野宿者になる前にもっとも長く就労していた仕事）で建設労働者であった人は42.7%であった。ここから、次のことが指摘される。まず、建設業が野宿者の最大の供給源となっている。その場合、寄せ場の役割が大きい。次に、最長職時に建設業に就労し、その後も建設業に就労し続けた人が多い。東京の野宿者（路上調査）で、直前職が建設土工（熟練工を除く）であった人が41.0%、寄せ場で求職・就労の経験をもつ人が39.7%であった（都市生活研究会,1999:81,96）。大阪の野宿者で、直前職が建設土工であった人が69.2%、寄せ場で求職・就労の経験をもつ人が57.9%であった（大阪市大:51,264）。このように、東京と大阪で、建設土工の経験、寄せ場の経験をもつ人の割合は異なる。とはいえ、いずれも、建設土工が野宿者の最大の供給源であることに変わりはない。ここに、建設業の動向と野宿者の形成の強い関わりが指摘される。

以上が、日本の野宿者の基本属性である。中・高年齢の元建設土工の単身男性。これが、日本の野宿者の最大部分である。野宿者数が多くないことを含め、これらの属性は、日本の経済・社会構造から生じたもので、たがいに相関しあっている。本稿で、その一端を明らかにしたい。

## II.野宿者への道

### 大阪調査

人々は、どのように野宿者になったのだろうか。彼らはなぜ野宿生活を脱出できないのだろうか。本稿は、人々が野宿者として都市底辺ヘスキッド（落層）した過程と、野宿者として都市底辺に隔離

される過程を、大阪の野宿者を事例に、仕事に焦点を当てて分析する。もって、彼らが固有の集団属性をもつに至った経緯を明らかにする。以下、とくに断わらない限り、大阪調査（回答者 672 人）のデータによる(21)。大阪調査は 1999 年に行なわれた。野宿者をめぐる経済環境は、2006 年の今日と異なる。また 1999 年とは、野宿者の公園居住が社会問題化される直前の段階、ホームレス自立支援法や自立支援センターが登場する直前の段階である。野宿者を取り巻く政治環境も異なる。しかしこれらの事情にもかかわらず、野宿者（問題）形成の基本構図は、今日と変わらない。このような認識に立って、以下分析を進める。

次に、大阪調査の聞き取りの内、大阪城公園の野宿者 130 人（テント生活者 119 人・非テント生活者 11 人、男 128 人・女 2 人）につき、聞き取りの原資料により、回答者の態度分析を行なう（調査期間は 1999 年 8 月 5 日～10 日）。記述は、野宿者の語り（を調査者が忠実に記録したもの）を量化せずに、語りの内容分析に基づき、言葉をそのまま引用する。もって、野宿者の仕事と境遇をめぐる意味世界を記述する(22)。野宿者の語りは、調査時点の状況でなされたものである。しかしここでも、野宿者の意味世界の基本構図は今日と変わらない、という認識に立つ。

## 学歴

大阪調査で、回答者（672 人）の 97.0%が男性であった（大阪市大:23）。また回答者（666 人）の内、50 歳未満 20.3%、50 歳代 45.0%、60 歳以上 34.7%で、平均年齢は 55.8 歳であった（大阪市大:24）。このような野宿者の性別、年齢別構成は、前掲の全国調査にほぼ照応する。では彼らは、どのような職歴を経て野宿者になったのだろうか。ここで、初職（学校を出て最初に就労した仕事）、最長職、直前職につき、産業・職業・従業上の地位別の仕事の変遷を辿り、彼らが野宿者に地位下降していった過程を見る。

まず家族背景である(23)。家族背景は、子の職歴の出発点を与える。親の仕事が家族収入を決める。家族収入が子の学歴を決める。学歴が子の職業選択の機会を決める(24)。野宿者は全体に、低位の出自に始まる階層的な境界化、つまり、下層世界のなかで職業の地位下降を辿った。野宿者の多くは、最長職ですでに不安定な地位にあった（後述）。最長職の選択は、初職に規定され、その初職は学歴に規定される。大阪調査で、回答者の学歴構成は、未就学・中学卒（旧制小学）62.1%、高校卒（旧制中学）33.7%、短期大学・高等専門学校 0.4%、大学（大学院）卒 3.6%であった（大阪市大:26）。つまり、野宿者の 6 割は、義務教育修了かそれ以下であった。これに対して、国勢調査（2000 年）に見る 55～59 歳層の男性の学歴は、中学卒 30.0%、高校卒 45.3%、短大・高専卒 2.9%、大学卒 17.6%であった（総務庁統計局,2000）。全国の同世代男性との学歴差は、歴然としている。野宿者は、大きく低学歴へ傾いている。ここから、野宿者の職歴の出発点について、次のことが推測される。一つ、出身家族が豊かでなかった。二つ、初職の選択肢が限られていた。三つ、初職が、最長職の低位な職業的地位を規定した。

## 初職

野宿者は、どのような仕事から職歴を出発したのだろうか。その前に、最終学校卒業地と初職の就労地の相関を見ておこう。初職の就労地は、全体に最終学校卒業地の傾向にある（大阪市

大:272)。とくに、最終学校卒業地が大阪の人の91.1%が大阪で初職に就いていた。また、回答者全体(630人)の38.1%が、大阪で初職に就いていた(東京が初職地の割合は低い、これは、調査地が大阪だったためと思われる)。ここから、次のことが指摘される。一つ、全体に地元で初職に就いた人が多く、とくに大阪でその傾向が強い。ここに、初職の選択肢が狭かった事実が示される。とすれば、そこに低学歴の影響が推測される。二つ、地元で多いのは、大阪である。この人々は、若い頃にすでに大阪の労働市場に参入していた。

次に、初職の産業・職業・従業上の地位別の構成を見よう(25)。産業別構成では、製造業43.6%、卸・小売・サービス業21.5%、建設業17.6%、運輸・通信業5.8%、農林漁業6.9%であった(回答者619人)(大阪市大:262)。職業構成では、製造・運輸(主に工員)47.1%、建設作業(土工)18.8%、販売・サービス18.2%、専門・技術・事務6.3%、農林漁業作業8.1%であった(回答者570人)(大阪市大:262)。従業上の地位では、正規雇用42.2%、非正規雇用(臨時、日雇、パートタイム、アルバイトなど)19.9%(臨時14.8%、日雇5.1%)、不明21.9%、自営・家族従事者14.1%であった(回答者644人)(大阪市大:262)。ここから、次のことが指摘される。一つ、製造業の工員が、初職の最大グループをなす。それが、初職段階にみる野宿者の最大の源流であった。二つ、建設土工から職歴を出発した野宿者が、少なくない。野宿者の大半が直前職で土工であるが(後述)、初職にすでにその徴候が看取される。初職で土工だった人には、土工一筋で野宿に至った人もいただろう。三つ、卸・小売・サービス業の販売員が、もう一つのグループをなす。ここでサービス職とは、ホワイトカラー職ではなく、販売店員、調理師、飲食・遊戯店店員、警備員などの下層サービス職を指す。それらの仕事は、正規雇用ではあるが、実態は長期雇用ではない。流動性が高く、限りなく期間雇用に近い。四つ、正規雇用が4割強に留まる。この多くは工員と思われる。しかし工員も、正規雇用とはいえ、就労期間は短く、実態は不安定雇用に近い(26)。五つ、非正規雇用が多い。「不明」もほぼ非正規雇用とみていい。また非正規雇用には、自営を除く家族従事者も含まれる。

就労の不安定は、初職の勤続年数と退職年齢にも伺われる。回答者の内、勤続年数4年以内が46.4%、5~9年が23.3%で、7割近い回答者が10年以内に初職を辞めている(大阪市大:263)。その時の年齢は、19歳以下が34.2%、20~29歳が43.5%であった(大阪市大:263)。つまり、3人に1人が20歳前に、4人に3人が30歳前に初職を辞めている。ここから、初職が不安定だった実態が推測される。……工員を中心に、土工、販売員、または家族従業員という不安定職種への就労。野宿者の多くは、ここから職歴を出発した。ここですでに、最長職の低位で不安定な地位への道が敷かれている。

## 最長職

最長職の産業・職業・従業上の地位別の構成を見てみよう。産業別構成では、製造業22.2%、卸・小売・サービス業13.2%、建設業51.3%、運輸・通信業7.1%、農林漁業2.4%であった(回答者636人)(妻木,2001:186)。職業構成では、「生産・運輸」(初職の「主に工員」と「土工」を合わせた区分である)78.5%、販売・サービス(主に販売員)12.5%、専門・技術・事務4.6%、農林漁業作業3.0%であった(回答者608人)(妻木,op.cit.)。従業上の地位で

は、正規雇用 26.6%、非正規雇用 43.2%（臨時 6.9%、日雇 36.3%）、不明 17.1%、自営・家族従事者 11.4%であった（回答者 650 人）（妻木,op.cit.）。ここから、次のことが指摘される。一つ、初職と比べて、製造業と建設業の比重が逆転している。生産・運輸の最大部分も、工員ではなく土工と思われる。二つ、正規雇用が 4 人に 1 人強に減少している。正規雇用の中心は工員と思われるが、初職で見たように、その就労期間は、実際は短期であった。三つ、これに対して、非正規雇用が 4 割を超え、しかもその内、日雇が多い。不明も非正規雇用に準じる。これら合わせて、6 割を超える。……最長職で、初職よりいっそう、建設業を中心とした不安定雇用へ傾斜している。最長職の段階で、直前職の土工から野宿へ至る道は、すでに敷かれていた。

### 直前職

直前職の産業・職業・従業上の地位別の構成を見てみよう。産業別構成では、製造業 9.3%、卸・小売・サービス業 10.6%、建設業 75.4%、運輸・通信業 2.9%、農林漁業 0.2%であった（回答者 647 人）（大阪市大:264）。職業構成では、製造・運輸（主に工員）13.5%、建設作業（土工）69.2%、販売・サービス 10.1%、専門・技術・事務 2.0%、農林漁業作業 0.2%であった（回答者 611 人）（大阪市大:264）。従業上の地位では、正規雇用 7.0%、非正規雇用 76.0%（臨時 10.5%、日雇 65.5%）、不明 9.6%、自営・家族従事者 5.9%であった（回答者 655 人）（大阪市大:264）。ここから、次のことが指摘される。一つ、建設土工が、全体の 7 割近くを占める。二つ、非正規雇用が 4 人に 3 人を占め、なかでも日雇が多い。これは大部分、建設土工の従業上の地位を表している。三つ、不安定雇用は、非正規雇用と不明を合わせて 85.6%に及んでいる。直前職での雇用の不安定は、決定的である。

これらの点を補足するために、回答者の「野宿に至った理由」と「直前職時の居住」について見てみよう。まず、「野宿に至った理由」では、「仕事がない」69.6%、「失業」11.4%であった（複数回答、回答者 552 人）（大阪市大:293）。合わせて 81.0%が、仕事を理由として野宿者になっている。「金がない」18.1%も、多くは仕事に絡んでの事情であろう。これらの事実は、直前職の不安定就労を傍証する。次に、居住形態である。一般に、仕事がなく、住居がない（かつセイフティ・ネットをもたない）人が、街頭に流れ出る。居住は、2 つの点で仕事に規定される。一つ、仕事による収入の有無が居住条件を決める。二つ、仕事が住居を提供する。企業の寮・社宅、借上げ住宅・アパート、親方宅や職場の住込みなどが、それである。これらでは、仕事の喪失が住居の喪失に直結する。大阪調査で、直前職時の居住形態は、「飯場・社宅」に居た者が 44.9%であった（回答者 559 人）（大阪市大:290）。これは、仕事と同時に住居を失った人々である。「アパート」住い（29.3%）にも、雇主の借上げが含まれるだろう。次に、「ドヤ」（日雇労働者が宿泊する簡易宿泊所）住いが 39.2%であった。これはすべて、日雇土工の人々である。日雇土工は、「飯場・社宅」「アパート」にも少なからず含まれるだろう。これらの居住条件は、直前職時の不安定就労を傍証する。

### 寄せ場

寄せ場とは、単身男性の日雇労働者が、手配師・人夫出しを介して、おもに建設仕事に就労す

る場所をいう。大阪の釜ヶ崎が日本最大の寄せ場で、これと東京の山谷、横浜の寿町、名古屋の笹島が、4大寄せ場と呼ばれる。全国の諸都市に、中小の寄せ場が散在する。この内、釜ヶ崎、山谷、寿町は、ドヤが集中するドヤ街（簡易宿泊所街）でもある。かつて寄せ場は、流動的過剰人口の日雇労働者をプールし、（建設）現場に送り出す労務機構の役割を担っていた。しかし公共事業が縮小し、ゼネコンさえ倒産の憂き目に会うなど、建設業が瓦解した。それは、孫請け企業に日雇雇用される人々を直撃した。寄せ場には、仕事もなく、ドヤにも泊れない労働者が沈殿した。寄せ場は、彼らがそこから市内に流れ出る停滞的過剰人口のプールとなった。こうして寄せ場は、現在、野宿者の重要な給源としてある(27)。大阪調査によれば、寄せ場で仕事をめた経験のある人は、57.9%であった（回答者 672 人）（大阪市大:48）。大阪の野宿者の過半数が、寄せ場を経て野宿者になっている。反対に、回答者の 42.1%は、寄せ場を経ないで、一般の（工員やサービス職などの下層）労働市場から街頭に流れ出た人々である。釜ヶ崎で就労経験のある野宿者が釜ヶ崎で最初に就労した時期を見ると、1990年代 34.0%、80年代 26.5%、70年代 21.1%、60年代以前 18.4%であった（回答者 397 人）（大阪市大:48）。これは、前述の、最長職～直前職で日雇土工が増加した時期に、ほぼ照応する。その上で、全体の 66.0%が 10 年以上前から釜ヶ崎に出入りしている。彼らは長期間、日雇土工として働き（最長職）、近年に野宿者になった人々である。他方、3人に1人強が 1990年代に釜ヶ崎に入った。彼らは、はじめから半ば野宿状態にあり、時どき日雇仕事に出たという人々である。寄せ場は、新たな労働力を受け入れる能力を失った。そのため、野宿期間が短い人ほど、寄せ場経験をもたない野宿者が増加する。

## 大阪への流入

人々は、どこで生れ、いつ大阪に来て（または大阪で生れ）、いつ野宿者になったのだろうか。人々の大阪来住の軌跡に、彼らが野宿者になった経緯を伺うことができる。まず、回答者（664人）の 82.1%が、大阪（府）以外の生れであった（大阪市大:25）。次に、就労地である。初職の項で見たように、（大阪、東京を除く地域の人で）最終学校卒業地に次いで多い初職の就労地は、大阪であった。また、初職で 37.8%（回答者 640 人）の人、最長職で 63.3%（回答者 640 人）の人、直前職で 90.3%（回答者 646 人）の人が、大阪で働いていた（大阪市大:269-276）。他地域で働いて、大阪へ来てすぐ野宿者になった人は、全体の 1 割に満たない。さらに、最初に野宿してから調査時までの期間（野宿と就労を往復した期間）を見ると、最初に野宿して 8ヶ月未満の人 23.6%、8ヶ月～1年 8ヶ月の人 34.7%、1年 8ヶ月～3年 8ヶ月の人 22.7%、3年 8ヶ月以上の人 19.0%であった（回答者 657 人）（大阪市大:30）。野宿と就労の往復期間が長い（1年 8ヶ月以上）人が 41.7%いる一方、それより短い（1年 8ヶ月未満）の人が 6割近くいる。ここから、次のことが指摘される。一つ、大阪の野宿者の大半は、他地域から大阪へ来た人々である。二つ、その多くは、職歴の早い段階で大阪に出て、長期に働いてきた人々である。つまり彼らは、働き盛りの頃に大阪に出て、高度経済成長期以後、大阪で働いてきた。三つ、野宿期間が短い人が多い。……大阪の野宿者は、大阪の職業階級を徐々に下降し、そして調査時点の少し前に野宿者になった。



## 地位下降

大阪調査により、野宿者形成の経緯を、仕事の変遷について見てきた。それは、次のように整理される。野宿者は、低位な家族背景ゆえの低学歴に仕事の出発点を与えられた。低い学歴は、仕事の選択肢を狭める。初職は最長職を規定し、最長職は直前職を規定し、直前職は野宿への道を掃き清める。工員から建設土工へ（未熟練職種から熟練職種へ）、そして失職（あぶれ）から野宿へ。その際、日雇土工における寄せ場の役割は大きい。また人々は、近年に野宿者になった。しかし彼らは、はるか早い時点で、野宿への道を歩んでいた。……これが、野宿者の初職から野宿への基本過程である。このように、彼らの地位下降は必然であった。それは、低位な地位から出発し、ますます下降する道程であった。この基本過程は、次のように要約される。

職業の地位下降（矢印は継起関係を示す）

（低位な家族背景→）低学歴→労務的職種（初職→最長職→直前職）

製造→建設 →（寄せ場）→失職→野宿

販売・サービス→建設→（寄せ場）→失職→野宿

建設 未熟練→熟練 →（寄せ場）→失職→野宿

「なんで貧乏に生れたんやろ。一生こんな暮しや思うたら、情けのうなる。故郷に帰ろうとも思わんし、帰るとこもない。将来のことは考えとくない。」（男、67歳）

人々が野宿者になる道は、仕事にのみ決定されるわけではない。それはまず、直前職時の居住条件に規定される。飯場や寮、住込み、社宅、企業借上げのアパートなど、失職が同時に住居の喪失を意味する不安定居住が、人々が街頭に流れ出る直接の原因である。この点で、野宿者問題は居住問題である。しかし安定した住居の確保は、結局は、収入次第である。大阪では、ジェントリフィケーションに伴う居住の排除は、（東京ほど）顕著でなかった。ドヤの宿泊代の高騰もいちじるしいものではなかった。次に、人々が野宿者になる道は、家族・親族とのネットワークに規定される。人々が野宿者になるには、3つのフィルターがある。一つ、失職により収入が途絶えたことである。二つ、保険や貯金など、代替の収入がないことである。三つ、金銭を援助する家族・親族がいないことである。人々は、これらの条件が重なった時にのみ、野宿者になる。その際、アジールとしての家族・親族の役割は大きい。野宿者の多くは、（野宿者になる前から）家族・親族から縁を切られている。野宿者の方も、連絡を断っている。野宿者は、物的・精神的に孤独な境涯にある(28)。

「あんたらも、お父ちゃんこんなやつたらどない思う。わしも人間やから、なんでこんなとこにいてんやろか考えることあるけど、考えてもしゃーないやんか。」（男、72歳）「母親には、正直に大阪でこじまやっていると告白してる。そやけど、離婚した妻んとこにいる子には、ちゃんと仕事してると嘘ついてる。」（男、44歳）

### Ⅲ.野宿者の隔離

街頭に流れ出ても、死ぬわけにはいかない。野宿者は、種々の方法で野宿をしのぐ。彼らは、野宿生活を脱出したいと思う。しかしもと来た道は遠い。仕事がない、体が労働に耐えない、市民の目が厳しい……。どうして彼らは、野宿生活を脱出し、「更生」「社会復帰」できないのだろうか。どのような壁が、それを阻んでいるのだろうか。人々の野宿者への地位隔離を、仕事に焦点を当てて分析すること、これが次の課題である。

#### 現在職

大阪調査によれば、回答者（671人）の内、「現在、仕事がある」（現在職）人が80.0%、「エサ取り」(29)や炊き出しで野宿生活をしのぐ人が20.0%であった（大阪市大:31）。では、現在職の中身はなんだったのだろうか。回答者（594人）の内、再生資源回収87.3%、日雇9.1%、特別清掃4.1%、その他10.3%であった（大阪市大:32）。日雇とは、建設・運送・サービス関係の日雇であり、特別清掃とは、市が高齢労働者に出す仕事であり(30)、その他とは、物売り（露店手伝いなど）や看板持ちなどの雑業である。再生資源の中身は、アルミ缶79.5%、粗大ごみ34.8%、銅線15.0%、新聞・雑誌7.9%、ダンボール6.0%であった（複数回答、回答者467人）（大阪市大:32）。仕事がある人の割合を野宿期間で見ると、4ヶ月未満の人55.4%、4～8ヶ月未満の人80.2%（回答者155人）（大阪市大:112）、8ヶ月～3年8ヶ月の人85.9%、3年8ヶ月以上の人80.0%であった（回答者657人）（大阪市大:112）。3年8ヶ月までをピークに、野宿期間が長くなるほど、仕事のある人の割合が増加する。また、仕事のある人の割合を野宿形態で見ると、テント生活者（公園や河川敷でブルーシートのテントを張って野宿する人）85.7%、非テント生活者（新聞紙などを敷いてごろ寝したり、簡易なダンボール・ハウスを作って野宿する人）58.6%であった（回答者671人）（大阪市大:98）。野宿期間が長くなるほど、テント生活者が増加する傾向にあるので（大阪市大:81-82）、仕事のある人も、野宿期間が長いテント生活者で多くなる。再生資源回収の仕事をする野宿者の中心は、この人々である。同時に、再生資源回収の仕事は、野宿の長期化の条件となっている。

#### 転職の意志

野宿者は、再生資源回収を主とする現在職から、どれほどの収入を得ているのだろうか。大阪調査によれば、月収1万円未満の人19.0%、1～2万円の人20.3%、2～3万円の人17.2%、3～4万円の人17.5%、4～5万円の人6.7%、5万円以上の人19.4%であった（回答者464人）（大阪市大:33）。月収3万円未満の人は56.5%で、5万円未満の人は8割を超える。これは、ほとんど飢餓水準の収入である。野宿者の困窮は、明白である。

野宿者は、現在職の今後について、どう思っているのだろうか。仕事のある人（489人）の内、「仕事を続けたい」人は26.0%、「仕事を辞めたい」人は37.2%、「仕方がない」人は36.8%であった（大阪市大:44）。「仕事を続けたい」人には、「満足している」人が含まれる。しかしそれは、「仕方がない」と大差ないのではないか。「仕方がない」とは、他に仕事がないから「続けるしかない」の意で

ある。つまり、できれば「仕事を辞めたい」である。ともあれ、74.0%の人が現在職に満足していない。競争が激しく、重労働で、収入が不安定な再生資源回収の仕事である。街頭美化運動の煽りで再生資源の回収がますます困難になっている。このような態度の傾向も当然である。

野宿者は、どの程度に転職したいと思っているのだろうか。大阪調査によれば、回答者（655人）の84.4%が「他の仕事に就きたい」と答え、15.6%が「就きたい仕事がない」と答えている（大阪市大:45）。「就きたい仕事がない」とは、「いい仕事があれば転職したい」の意である。つまり、回答者の全員が、転職したいと思っている。先に見た「仕事を続けたい」の真の意味が、ここで明白になる。転職希望を職種で見ると、「何でもいい」42.1%、「技術・技能が活かせる仕事」27.1%、「軽作業」14.9%、「安定した仕事」8.0%であった（回答者 549人）（大阪市大:128）。「なんでもいい」とは、「どのような仕事であれ、今の仕事よりはまし」の意であり、切羽詰った態度の表明である。「技能・技術が活かせる仕事」「安定した仕事」は、「なんでもいい」よりやや余裕ある態度である。「軽作業」は、高齢者に多い希望である。

では野宿者は、実際に求職活動をしているのだろうか。大阪調査によれば、仕事を「探している」人46.2%、「探していない」人53.8%であった（回答者666人）（大阪市大:45）。転職の意志をもつにもかかわらず、仕事を「探していない」人が過半数である。なぜ彼らは、求職活動をしないのだろうか。その理由は、「疾病・障害」10.3%、「高齢」19.4%、「手配師に相手にされない」3.7%、「仕事がない」41.7%、「その他」32.6%であった（回答者350人）（大阪市大:66）。求職活動をしない理由の大半は、「仕事がないから探してもむだ」と「歳や体に見合う仕事がない」である。「その他」も遠からずであろう。野宿者は、求職活動の無駄を知悉している。実際に転職できる人は、ごく一部の幸運な者である。求職活動をしようがしまいが、結果は大差ない。野宿者の転職機会は、ほぼ完璧に閉ざされている。ゆえに「仕事を探してもむだ」である。

## 転職の方法

転職は、当然、若い人や技能・技術をもつ人が有利である。技術・技能がない人には、職業訓練を希望する人がいる。大阪調査によれば、回答者（651人）の29.8%が職業訓練を希望している。年齢別では、45歳未満層の68.6%、45～55歳層の31.7%、55～65歳層の13.1%、65歳以上層の13.1%の人が、職業訓練を希望している（大阪市大:73）。若い年齢層ほど、希望者が多い。彼らには、技能・技術を活かす機会が望める。問題は、技能・技術を修得しても、転職できるかどうかである。職業訓練を「希望しない」人は回答者の70.2%に及ぶが、そこには、技能・技術を修得しても「転職の展望がない」という態度が潜在する。そもそも回答者（664人）の48.2%が、「技能・技術がある」と答えている（大阪市大:47）。この人々でさえ、野宿生活をなし、再生資源回収の仕事で窮々としている。技能・技術を修得しても「転職の展望がない」と思うのも、当然である。

転職への道を拓く、もう一つの方法がある。政府・自治体は、野宿者の就労を支援している。自立支援センターは、その一つである（大阪調査の時点で、その計画は知らされていたが、まだ設立されていなかった）（31）。それは、ハローワークと組んで、野宿者の正規雇用での就労を支援するもので、入所期間は最長6ヶ月である。入所者は、センターに起居し、研修を受けた後、ハローワークに通い、

電話などで企業の求人に応募する。大阪調査によれば、センターへの入所を「希望する」人は53.2%であった（回答者643人）（大阪市大:73）。つまり、入所を「希望しない」人が半数近い。その理由は、「すぐにもできる仕事がほしい」「センターへの入所に抵抗がある」「入所しても仕事が見つかるかどうか疑問だ」「仕事が見つからなくても6ヶ月で追い出される」などである。高齢層の人ほど、「今でもできる仕事がほしい」と望む傾向にある（大阪市大:73）。調査後、自立支援センターができた。しかし、そこから就労できた人は（今なお）少ない。多くの場合、雇主の野宿者に対する偏見が、障碍になっている。入所者は、自立支援センターを「住所」として求人応募する。しかし、自立支援センターにいること自体が野宿者であることの烙印となる。野宿者が住所を告げた途端、相手に電話を切られる(32)。「自立支援センターおおよど」で、2000年10月2日～04年11月30日の間に、延退所者が600人いた。退所理由は、「就労退所」が289人で、これに仕事が見つかって「希望退所」した人を加え、転職退所者は50.8%であった(33)。しかし問題は、転職の中身である。就労退所しても、多くの人が、ほどなく仕事を辞め（させられ）ている(34)。いったん一般社会に「復帰」しても、すぐ街頭へ追い返される。しかも自立支援センターは、一度退所したらふたたび入所できない。センター入所を「希望しない」人々は、このことを見越している。

### 野宿脱出の頓挫

転職とは、よりましな仕事に変わり、野宿生活を脱出することである。しかし、ごく少数の幸運な者を除いて、その願いは頓挫していく。技術や技能があっても、転職は容易ならない。自立支援センターに見るように、野宿者の正規就労はとくに困難である。就労できても、すぐ仕事を辞め（させられ）る人が多い。野宿者が就労できる仕事がないし（経済的原因）、仕事があっても野宿者に回ってこない（社会的原因）(35)。野宿者は、求職活動の無駄を知り、転職を諦めていく。こうして、転職と野宿脱出の夢が潰れていく。野宿者は、現在職を続けるしかない。仕事がある野宿者で、これである。仕事がない野宿者は、「エサ取り」か、炊出しに縋るか、病院や施設に入るか、生活保護を貰うしかない。それさえできない野宿者は、野垂れ死ぬしかない。……こうして、野宿者の地位隔離が完結していく。階層の固定化は免れない。野宿者と「一般」労働者の間はもとより、彼らと日雇労働者の間にさえ、大きく深い溝がある。野宿者は、構造的に隠蔽されている。野宿者は、一步ずつ、行路病死に向けて歩むしかない。

「仕事はないし、住所不定やから、落ちたらもう這い上がれん。どんどん落ちて、最後は野垂れ死にや。」（男、53歳）

## IV. 仕事の意味

野宿者は、みずからの境遇をどう捉え、どうのごうと思っているのだろうか。彼らの状況定義としのぎの方法を分析し、野宿者の地位隔離の主観的過程を明らかにすること、これが次の課題である。野宿者の仕事の主観的意味の分析に際し、ここで3つの場面設定を行なう。一つ、現在職に対する態

度について分析する。大阪調査で、仕事がある野宿者は、全体の 8 割であった。二つ、大阪調査で、仕事がある人で再生資源回収の仕事をしている人は、8 割を超えた。ゆえにここでは、再生資源回収の仕事をしている人を例に、分析を進める(36)。三つ、転職や希望の仕事に対する態度について分析する。前傾のように、8 割以上の野宿者が、転職を希望している。

野宿者の平均年齢は 55.8 歳であった。それはほぼ、日雇土工などの仕事に就労できない世代である。しかも野宿者は、住所も保証人も電話もない。これらすべて、求職のハンディとなる。野宿者は、仕事がない上に、種々のハンディで就労が困難な人々である。野宿者は、仕事地獄のただなかにいる。その実態は、仕事がない人とボーダーレスである。大阪調査で、仕事がない野宿者は 2 割であった。仕事がない人には、「働けない」人と「働かない」人がいる。「働けない」人とは、まず「仕事がない」人である。次に、体力的に「働けない」人である。「働かない」人とは、まず「仕事に疲れ果てた」人である。次に、仕事探しを「諦めた」人である。「働かない」= 怠惰という皮相な解釈など、ここでは論外である。それどころか、「働けない」「働かない」人にこそ、もっとも苛酷な境遇にある野宿者が多い。

「ここ（大阪城公園）における人は、まだまだ働きとて何らかの動きをしてる人、まったく気力をなくして、ただ生きてるだけの人、そうやなあ、半々かなあ。」（男、53 歳）

まず、体が悪くて働けない野宿者がいる。

「仕事はしとらん。若い頃、左足首を捻挫して、長時間歩いて、アルミ缶の回収ができんようになった。これからも仕事する積りはない。」（男、58 歳） 「仕事しとらんから、収入ゼロや。ここ来てから、1 カ月ぐらい缶拾いやったけど、腰痛があるし、体力的にきついし、場所も遠いし、缶拾いも多いしで、辞めてしもうた。」（男、67 歳）

プライドが高く、街頭の仕事に「落ちる」ことを拒絶する野宿者もいる。

「ここにも日雇の斡旋業者来るけどな、人の足元見て来てるような奴やから、気に食わん。そやから、土方もしとらん。」（男、50 歳） 「仕事はしとらん。アルミ缶拾ってまで生きようとは思わん。今は、JR の新大阪や上新庄や京橋駅まで出かけて、手配師に仕事を当たってる。」（男、61 歳）

## 再生資源回収

野宿者は、「ごみを漁る乞食」同然に見下す市民の視線のなか、再生資源を回収する。

「自転車で仕事してても、おばちゃんに白い目で見られたりする。そりゃ辛いわ。迷惑どころか、役に立つ仕事してるはずなんやけど。」（男、58 歳） 「ごみ捨て場でアルミ缶回収する時、団地のおばはんは露骨に嫌な顔されたりする。」（男、49 歳） 「空缶集めはカッコ悪い。何度やっても慣れん。はじめの頃は惨めで、情けのうて涙出た。周りに人おったら、恥ずかしくて、落ちてる缶も拾えなかった。今は少しは慣れたけど、それでも抵抗ある。」（男、61 歳）

再生資源の回収は、リヤカーに荷を積んで街を巡回する重労働である。競争者も多い、縄張りもある、住民が再生資源を業者に直接渡す、単価が安いなど仕事は厳しい。

「粗大ごみが出る場所の情報があれば、その前の夜から場所取りに行かなあかん。とくに競争率が激しいのは夜や。団地のごみ捨て場なんかで、夕方から業者がぎょうさん溜まってる。それに縄張りもある。」(男、49 歳) 「収入はめちゃ不安定や。2000 円まで行く日もあれば、まったく金入らん時もある。」(男、49 歳) 「主な収入源はアルミ缶と銅線の収集や。ダンボール集めは重労働で、収入も悪いからやらん。それでも、3 時間歩き回っても、500 円くらいなもんや。」(男、59 歳) 「最近の心配ごとは、粗大ごみの収集方法が、住民から業者に直接連絡して持つてく方式に移ったことや。この方式が広がると、わしらは、粗大ごみの収集はできんようになる。」(男、67 歳)

しかし、他に仕事がない野宿者は、再生資源回収で日銭を稼いでしのぐしかない。

「恥ずかしいなんて言うとな。はじめは死ぬほど嫌やったけど、今は嫌な顔されても気にせんようにしてる。こんな仕事続けとうない。仕方なくやってるんや。食べなあかんがな。」(男、53 歳)

それでも、たまに幸運な野宿者もいる。

「免許持ってるんで、寄せ屋が来てな。新今宮駅の近くで、新しう寄せ屋始めた人やそうな。車運転できるいうんで、車貸してくれてな、広い地域でアルミ缶集めてる。仲間一人とやってる。大阪市はもちろん、大阪府、京都八幡まで行ってる。今は車使えるし、日に 150 キロも 200 キロも集められるさかい、前よりは楽や。時間は、朝 5 時から夕方 5 時くらい。自治体の回収より早う回らなあかんから、朝は早い。連中と鉢合わせんなることもあるけど、とくに文句言われることはない。日当は 3000 円くらい。週 3 日しか働けんさかい、生活は苦しいけどな。」(男、61 歳)

再生資源回収の仕事のなかで別の仕事を貰った野宿者もいる。

「3 ヶ月ほどで慣れてしもうた。近頃は毎日同じコース回ってるせいか、缶拾ってると、ご苦労さんなんて声かけてくれる人もいる。そんな時は嬉しいで。顔も知られるようになって、電気会社の人に頼まれて、エアコンのフィルターの取り外しの仕事を手伝わせて貰えるようになった。そんな時は他人の家やマンションに入るから、服や風呂なんかきちんとせなあかん。」(男、59 歳)

野宿者にとって、再生資源回収の仕事は、次の仕事の繋ぎでしかない。

「こんな仕事するんは、景気が回復するまでや。もうちよつとの辛抱や。できることなら、寮みたいなどこ入って、土木関係の軽作業して暮したい。」(男、59 歳) 「ちゃんとした仕事がほしい。も

ともと体動かして仕事するんが好きやさかい、本当は鉄筋工の仕事があつたら行きたい。歳食つてるから無理やろな。仕事にこだわらんかったら、どないにでもなると思うけど、プライドいうんかな。土方や警備員なんかしとうないし、向いてもおらん。もっと切羽詰まってきたら、そんな好き嫌いも言っとれんやろな。とにかく今は、この仕事続けるしかないんや。」(男、51歳)

最後に、再生資源回収の仕事を頑なに拒絶する野宿者もいる。

「金にならんし、体もきついし、人目に触れるんも嫌やし。ごみ漁りなんかせなあかんくらいやったら、なんか犯罪犯して刑務所に入った方がましや。」(男、59歳)

### したい仕事

野宿者は、どのような仕事に転職したいのだろうか。大阪調査の聞き取りでは、調理師、バーテン、運転手、衣料店、花屋、パソコンなどの仕事が挙げられた。しかもっとも多いのは、かつて就いていた建設仕事である。日雇土工は、いまや野宿者にとって一つ上位の、恵まれた地位である。

「アルミ缶拾いなんか、カッコ悪うてできん。わしはトラックや。どのような仕事でもええいうんやのうて、こんな仕事したい、あんな仕事したい思うんは、人間、自然なこととちゃうか。」(男、53歳)  
「土方の仕事に戻りたい。土方にこだわる積りもないけど。住み込みで、パチンコ屋、ラブホテルの雑用係なんてのもええ。住み込み仕事の募集探すんで、新聞はよう買うてる。歳食ってるさかい、パチンコ屋で働くんは難しい。ラブホテルの方が現実的かもしれん。」(男、51歳)

大阪調査で、したい仕事を挙げた回答者は少ない。人々は、仕事を選ぶ余裕がないほど切羽詰っている。

「いろんな資格もってるんで、それを活かす仕事ができや、ベストなんやけど、そんなこと言っとれん時代や。なんでもええは、仕事は。老体鞭打って、どのような仕事でもやりませ。」(男、50歳)

仕事があれば何でもいい、とにかく働きたい。収入さえあれば、野宿を止められる。これが、野宿者の切実な願いである。

「仕事がほしい。西成（釜ヶ崎）のセンターは、いつ行っても仕事見つからん。チラシや新聞も毎日見てる。職種や労働条件は厭わん。デズラ（賃金）も安うてええ。仕事見つかったら、飛んでってバリバリ働くでえ。一日も早うこんな暮し止めたいんや。」(男、58歳) 「とにかく仕事がほしい。我儘は言わん。ガードマンとかビル清掃とか、まだまだやれる自信ある。住所不定でも雇ってくれるとこ、この歳でも雇ってくれる住み込みがあれば、ええんやけど。住所決まったら、選べる仕事も増えるし、みんな好転するんや。そのきっかけがほしいんや。」(男、53歳)

拳句の果てに、次のような「冗談」まで飛び出す。

「（阪神淡路大）震災みたいなでかい地震、また起きんかなあ。できれば 2～3 年おきに来るとええんやけどなあ。」（男、44 歳）（37）

野宿者に仕事がないのは、仕事が少ないだけでなく、野宿に伴う不利な条件を抱えるからでもある。

「仕事があればしたいと思うけど、歳やから半ば諦めとる。なんか資格も、できればほしいけど、年齢的に無理や思う。月に 1～2 度は、ないやろけどもしかして思うて、職安に探しに行くけど、身元保証人や、年齢や、電話がないんで連絡取れんや、住所不定や、条件が不利で、いまだ見つからん。」（男、52 歳）「新聞の求人見て電話しても、45 歳以上やと、うちの会社、今は求人はありません。新聞会社と広告掲載の契約してるもんで、載せてるだけですいうて、門前払いくらう。今は長靴、安全靴、地下足袋、運動靴(38)なんかの道具一式揃ってないと、仕事は雇ってくれん。玉掛け(39)資格もってる人でも、仕事就ける人は半分くらいや。」（男、57 歳）

仕事を探しても見つからない。その状態が長引くにつれ、仕事探しを断念していく。

「新聞なんかで仕事探すことあるけど、年齢に制限があったり、面接行っても、もういっぱいと言われる。ガードマンや清掃の仕事は、倍率高すぎるから、はなから申し込まん。」（男、55 歳）  
「職業訓練受ける積りはない。歳が歳やから、今から技術身につけたところで、雇って貰えんに決まってる。」（男、57 歳）

## 行政のこと

仕事がない。仕事があってもはねられる。最後の頼みの綱は、行政である。大阪府・市は、政府の「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法」（2000 年）による緊急地域雇用特別交付金を受け、緊急地域雇用創出特別基金事業（あいりん生活道路環境美化事業、あいりん高齢日雇労働者等除草等事業、あいりん高齢日雇労働者就労支援事業）を実施している（大阪市、2005）。しかしそれらは、高齢野宿者を対象とした緊急の雇用創出事業である。恩恵に預かれる野宿者は、一部かつ一時に留まる。野宿者の行政に対する要望ははるかに多様で、はるかに大きい。まず、雇用創出の制度に対する要望である。

「特別清掃はぎょうさんの人が登録してるから、1 回に雇われる人数が少ない。いつ回ってくるかわからんから、登録もしたらん。月 1 回で 3000 円貰うより、日当安うていいから、毎日が、2～3 日に 1 回は仕事あったらな。安うてええから、50 過ぎたら雇えるようにしてほしい。」（男、57 歳）  
「ハローワークのように、コンピューターで仕事探すんでうて、1 対 1 の面接の方法で探せるようにしてほしい。コンピューターの使い方分からんから、困ってる。」（男、58 歳）



野宿者の目には、行政が仕事を出そうと思えば、工夫・機会はいくらもある。

「公園の掃除なんかは、年金生活者やなくて、わしらにやらしてくれるんが順番やで。」(男、59歳) 「個人の特技を活かせる仕事を紹介してほしい。ホームレス関係の施設建てるにしてから、わしらを仕事で使って、建ててほしい。」(男、48歳) 「淀川沿いのテトラポットなんかは、ごみいっぱい置いてあって、あれの掃除。ああゆうのを仕事でさせりゃええんや。環境の問題とか最近騒いでるやない、ダイオキシンとか。そんなん、ずっとやらせろ言うてないんやから。とりあえず3~4年やらせてくれれば、ええんやから。」(男、49歳)

日雇労働者の失業救済や年金に対する要望もある。

「ここ2~3ヶ月仕事しとらん。白手帳(40)もってるけど、仕事ないから印紙貼ることできんで、期限切れの手帳が更新できん。」(男、50歳) 「仕事辞めるまで年金を20年近く払ってきた。掛け損にはしとない。そやけど、年金貰うのに住所不定やったらあかんやろな。警察にでもここに住んでること確認して貰わなあかん。あと5~6年したら、そうするつもりや。」(男、59歳)

行政に不信を抱く野宿者は少なくない。

「行政はわしらのことをごみみたいに扱ってる。わしらに悪いところあるかもしれんけど、こっちも野宿せなあかん事情があるんや。一時の臨泊(41)や強制撤去に頼るんやのうて、もっと根本的な解決考えて貰わなあかん。」(男、51歳)

行政に要望しない野宿者もいる。まだ余裕のある野宿者である。

「行政に期待することなんかない。それに、不満言うたらきりがない。なんとか自分の力でやっていきたい。その気んなれば仕事はある。行政の斡旋に頼る気なんかない。」(男、61歳)

みずからの境遇を自業自得と思う野宿者、行政への期待を諦めた野宿者もいる。

「こんな生活になったんは、若い頃悪いことしたり、今までの心掛けが悪かったからや。自分のことを棚に上げといて、行政やボランティアにとやかく言えたもんやない。」(男、54歳) 「歳やから、仕事があってもできるかどうか分からん。もう、行政に望むことなんか何もなし。自分はただ、残りの人生を天に任せるだけや。」(男、64歳)

## V. 境遇の意味

## 心の幽閉

「公園に来た当初は、恥ずかして、ずっとテントのなかに籠った。野宿を始めてからは、こっちら娘に連絡取ったらん。ここから電話すると、蝉の声が入ってしまう。娘の顔が見れんのが悔して、情けのうて。ほんま、泣けてきます。」(女、57歳)

野宿者はみずからの境遇を惨めに思う。その惨めには、2つの感情が含まれている。それは、野宿生活が「恥ずかしい」と「つらい」である。野宿者は、一日も早く野宿生活を脱出し、「普通の生活」に戻りたいと思う。ここで「普通の生活」とは、必ずしも「一般の市民生活」を意味しない。野宿者にとって「普通の生活」とは、仕事に就き、住いを借り、家賃を払って、野宿生活を脱すること、それだけである。野宿生活は、よぎなくされた「仮の暮らし」である。野宿者はそう思っている。

「普通の暮らしに戻りたい。バリバリ仕事して、アパート借りて、普通の暮らしがしたい。抜け出せるもんなら、こんな生活一刻も早く抜け出たい。それが願いや。プライドがあったら、こんな生活できるもんじゃない。」(男、50歳) 「収入は、粗大ごみのアルミ製品なんか解体して業者に売ることや。金がなくなれば仕事するという調子で、不安定なもんや。日雇の仕事で西成(釜ヶ崎)に戻りたい。野宿の足洗いたい。立ち退け言われても、仕事ないから行くところあれへん。仕事さえあれば、すぐでも出て行くで。」(男、51歳)

野宿者は、そのために仕事を探す。朝早く起きて釜ヶ崎へ行く。職業安定所へ行く。チラシや新聞を見る。友人に仕事情報を聞く。会社に電話する。職業訓練に行く。いずれも、尋常ならない努力である。そして野宿者は、定職はおろか日雇仕事さえ、就労が容易ならないことを知る。次第に、切羽詰っていく。最初は、あれこれの仕事に就きたいと思う。次に、どのような仕事でもいいと思う。また最初は、自力で仕事を探そうと思う。次に、行政でも何でも、仕事があればいいと思う。その内、求職活動の無駄を知り、転職を諦める。この時点で、野宿生活脱出の夢は、最終的に潰える。しかしそれでも、死ぬわけにはいかない。まずは、再生資源の回収か、たまの日雇仕事か、あれこれの雑業かである。街頭世界では、再生資源回収の仕事さえ、一つの地位である。次に、「エサ取り」である。また、炊出しに頼る。最後に、福祉に縋る。こうして野宿者は、野宿上層から下層への、街頭社会での落層コースを辿っていく。そして次第に、気力を失っていく。生きることを諦めていく。生きていても仕方がない。「緩慢な自殺」(額田,1999: )への旅が始まる(42)。……こうして、野宿者の地位隔離は、構造的な必然のなか、彼らの主観的世界においても完結していく。

「この先あんまり生きとうない。もう歳や。その内死ぬんをじっと待ってるだけや。」(男、64歳)

## 生のもがき

ところで、以上は、野宿者世界の半面でしかない。人間の主観は、状況のたんなる投影ではない。死との対照において、生はつねに両義的である。ゆえに、その解釈も二様でなければならない。一方で

人間は、状況に服し、生をひさぐ。その先に死がある。他方で、状況に抗い、生をもがく。人間は、この両極を漂流する(43)。野宿者の意味世界は、読み直される。そして、正反対の旅が始まる。「生きたい。」その一心で野宿者は、苛酷な境遇をしのぐ。その苦闘のなかで、野宿者は、野宿生活を構築していく(妻木,2003)。再生資源回収の仕事は、空腹との格闘である。空腹がしのげれば、次に野宿者は「普通の生活」をめざす。野宿生活を脱出したい。その意思の原動力は、恥の解消と安全の希求である。野宿者は、よりよい仕事を求める。ある者は自力で、ある者は行政に縋って。しかし野宿者は、次第にその努力の無駄を悟る。そして努力を中断する。中断は諦めであり、諦めは絶望である。同時に、諦めは開き直りであり、方向転換である。野宿者は「エサ取り」に奔走し、炊き出しの列に並ぶ。最後に、行政の福祉に縋る。そして、シェルターや病院で、新たな集団生活が始まる。生活保護で福祉アパートの生活が始まる。……この営みのすべてが、野宿者の、もがきの生活実践である。野宿者は、街頭で生き抜く知恵(street wisdom)を習得し、街頭のジャングルを這いずり回る。山口は、この野宿者の営みを、生き抜き戦略(survival strategy)と呼んだ(山口,2001b:108)(44)。ここでは、野宿者が生き抜き場と営みをさらに特化し、「街頭出し抜き戦略」(street smart strategy)と呼ぼう(45)。それは、街頭の困難な生活条件を賢くしのぐ営みであり、街頭での生活構築の営みである。野宿者がこの抗いを止める時とは、生きる意志を喪失し、無為のまま死を待つ瞬間だけである。

野宿者の街頭出し抜き戦略とは、具体的にどのようなものだろうか。それは、仕事の探し方、飢えや寒さ暑さのしのぎ方、羞恥心や孤独のしのぎ方、市民や行政や警察や支援者との接し方、強制退去への心構え、野宿脱出の方策のすべてを指す。ここで(大阪調査の聞き取りから)、野宿者の街頭出し抜き戦略の一端を垣間見ておこう。記述を、テント生活の構築のための必須の方策として、①仕事の要領、②食料の調達、③住居の確保、④暮しの技能に絞ることにする。

### ①仕事の要領

野宿者の代表的な現在職は、再生資源回収の仕事である。仕事の苦労は尽きない。

「粗大ごみ集める範囲は、市内どこでも行く。どこでいつごみが出されるかは、区役所で収集日程表を貰って確認してる。」(男、59歳)「粗大ごみの情報は、区役所のコンピューター・サービスでアウトプットしてる。」(男、49歳)「アルミ缶の収集は、団地やマンションなんかは、一挙に大量の収穫があるから効率がいい。同業者の競争率も高い。だから先を越されんように、朝早う出る。自分は6時頃に出るけど、3時~4時という人もおる。」(男、59歳)「大阪城公園の近くは、釜ヶ崎からも拾いに來る人が多いんで、なかなか集まん。江坂の辺りやと、住民がごみをきちんと分別して捨てるんで、集めやすいし時間もかからん。」(男、59歳)「桜ノ宮の(寄せ屋の)Nは、集めた空き缶の重量をごまかすから、すぐ止めた。」(男、59歳)

効率的に仕事をするため、仲間と組んで仕事をする野宿者もいる。

「友人は3人いて、互いにアルミ缶回収の場所や時間などの情報をやりとりしてる。」(男、53

歳) 「仲間といっしょに空き缶や粗大ごみを収集してる。稼ぎは一部を共有で貯めといて、残りを分けあってる。」(男、48歳) 「空き缶は1キロ80円で、1日だいたい1000円ほど稼ぐから、帰りは相当な重さになる。1人だとなかなかしんどい。ときどき友達と組んでやってる」(男、59歳)

## ②食料の調達

現在職だけでは生活をしのげない。仕事がない野宿者もいる。たちまち飢えが襲う。食料をどう調達するか。「エサ取り」の知恵は、野宿者の死活を決する。

「はじめは食料の集め方が分からなくて、周りの人に頭下げて、ノウハウを教えて貰った。」(男、53歳) 「コンビニの廃棄食品を集めてる。集める時はごみを散らかさんよう気つけてる。」(男、60歳) 「コンビニは、トラブルを避けたいんで、店員から苦情が出た店には行かん。他の野宿者が御用達にしてる店にも行かん。」(男、49歳) 「コンビニの店長から食品を貰う時、仕入れ値を他の店に漏らさんように約束してる。」(男、53歳) 「パン屋から古いパンを貰ってる。タバコは拾って、人が口をつけた5ミリほどカットして吸うてる。」(男、47歳)

コンビニの回収食品で商売をする者もいる。これは立派なビジネスである。

「コンビニの期限切れ弁当の販売を始めた。コンビニの店長に、20数件直接話して、はじめは7~8件が契約してくれたけど、競争が激しくて、弁当出してくれる店が3店に減ってしまった。おにぎりとお弁当を組み合わせで100円で、西成(釜ヶ崎)で売ってる。午後7~8時から集め始め、午前2~3時に西成に行って、1時間ほどで完売できる。売上げは、1日1000~2000円になる。集めたのを全部売ってる人もいるけど、腹を壊すのは可哀想やから、傷みが早そうなのは除いてる。そうすると3分の1ぐらいになる。ビニール袋に包んであるから、むれやすい。」(男、58歳)

自炊をする野宿者もいる。その技量は主婦にも勝る。

「材料はスーパーで買って、カセットコンロでラーメンなどを作ってる。人参、ピーマン、魚の缶詰に卵に、カレーのルーで味付けして、栄養のバランスも考えてる。それに焼酎の水割りを1杯いうんが、いつもの食事や。」(男、59歳) 「米も材料も買ってる。昔喫茶店やってたから、調理はたいていできる。電気がないし、冷蔵庫が使えんのが不便や。水は近くの水道を使うてる。」(男、64歳) 「食材を安く買うため、スーパーの閉店間際の値引きの時間に行く。たまに肉も買うけど、麦や塩なんか、できるだけ安いもんを買って、味噌汁など作って食べてる。残った金で、酒を少し買って飲むんが楽しみや。」(男、62歳)

## ③住居の確保

次は、住居の確保である。大阪城公園には、テント暮らしの野宿者が多い。野宿者は、工夫を凝ら

してテントを建て、そこに生活用具を揃える。その技術は長年の一人暮らしのなかで蓄えたものである。

「3つのテントを繋ぎ、周りをシートで囲んで、屋根をつけて、テラスも作る。真中に空間をとって、机と椅子を置いている。家具類は、ガスコンロ、冷蔵庫、テレビ、ガソリン発電機、鍋、フライパンなどで、すべて粗大ごみで賄った。」(男、58歳、この項は調査者の観察文による) 「木立の下にブルーシートを張ってテントを建てた。自転車を置くスペースも確保した。雨に濡れないように屋根にシートをかけ、夏は風通しがいいように、周りに、簾や網目のあるシートを張った。」(男、64歳) 「ブルーシートを二重にして、なかに市販のキャンプ用テントを張って3重にした。そうすれば、雨が漏らないし、日射も少しは防げる。テントの内側に数センチの土盛りをして、水が入らないようにした。外側には排水溝を掘って、体を洗った時に水がスムーズに流れるようにした。テントの奥は寝室にし、入口に簾を掛け、ドアに針金ハンガーで取っ手を付けた。」(男、59歳) 「テントの骨組みは、拾ったパイプを加工して組み立て、ガラス窓の枠にも嵌め込んだ。生活用品は、拾った物と買った物がある。自転車は2台あり、1台は仕事用に特別仕様で、後ろに空き缶運搬用の台車を接続した。これは、4500円で買ったのを加工して作った。」(男、58歳)

#### ④暮らしの便宜

野宿は生活である。不便な住条件のなか快適に暮らすために、野宿者は、種々の事柄を解決しなければならない。

「水はトイレの手洗い場を使ってる。飲み水は沸かして飲んでる。夏は水道で体を洗ってる。冬は体を拭いてる。」(男、72歳) 「身障者用のトイレは広いんで、体洗う時は鍵かけて使う。使う人が多いから、夕方になると行列ができるほどや。」(男、51歳) 「夏のテントは、蚊と虫との戦いや。蚊取り線香は、勿体ないからたまにしか使わん。」(男、58歳) 「携帯電話はもってる。充電は兄貴の発電機を借りてる。ワープロで日記もつけたいから、自分の発電機をかうつもりや。」(男、65歳) 「炊事用品や生活用品は、粗大ごみや貰い物で一通り揃えた。炊事や洗面なんかの衛生に気遣う用品は、粗大ごみや貰い物で調達するのが嫌やから、新品を買った。自転車やラジオは、中古品を買った。」(男、55歳)

野宿者は、公園での野宿が「不法」であることを知っている。周辺住民に迷惑だと思っている。住民の通報は、行政の強制退去の口実になりかねない。野宿者は、住民に迷惑にならないよう慎重に距離を取り、生活を厳しく律している(青木,2005:63)。

「住民との関係には神経を使ってる。本当はこんな所に住んではいかんのやから、迷惑にならんよう暮してる。」(男、59歳) 「警察とか通行人とか役人とかと接触はまったくない。できるだけ世間の人と関わらんようにしてる。それが一番や。」(男、64歳) 「ごみは散らかさん。一般世間の常識に合わせて暮してる。世間よりも風当たりが強い分、身の周りを整えるよう気遣ってる。」(男、53歳) 「髪を切って、髭も剃って、服装も綺麗に、身なりを整えるようにしてる。」(男、48歳)

「水はトイレを使うてる。娘さんと出くわすと恥ずかしいから、行水は夜にしてる。」(男、61 歳)  
「テントの周りは、吸殻やビニール袋が落ちてたらまとめて、綺麗にしてる。」(男、61 歳)

### もがきと抵抗

野宿者の街頭出し抜き戦略は、縦横無尽である。それほど野宿生活は厳しく、生活の苦闘は尽きない。そこには、十人十色の野宿者像がある。それらの微細で執拗なもがきを左右するもの、それは、野宿者の境遇への心情であり、アイデンティティである。一方で野宿者は、野宿生活を、恥ずかしく不本意な選択だと思っている。

「誰にもこんな姿見られとうない。そやから、家族との連絡も取っとらん。あんたらも、父ちゃんこんなやつたらどう思う？……そりや人間やから、なんでこんなところにいるんやろと考えるけど、考えてもしゃーない。」(男、72 歳) 「こんなところで野宿して、(住民に)嫌われてると思う。そやけど、嫌われても行くところが無い。住まわせて貰ってる以上の親切はないわ。」(男、72 歳) 「夜な夜な若者が花火してうるさいけど、住んではいかんとこに住んでるんやから、気にせんようにしてる。」(男、53 歳) 「一番恐いんは、テントを撤去されることや。何も要らんから、それだけは止めてほしい。撤去されたら従うしかないがな。そんな時は他の公園に行くしかない。」(男、49 歳)

他方で野宿者は、みずからを社会の犠牲者だと思っている。そして、正当に生きる権利があると思っている。野宿者は、市民や行政の不当な処遇に不満を述べる。

「野宿してる人間に、根っから悪い人はおらん。怖い、汚いという偏見は捨ててほしい。」(男、48 歳) 「住民がごみ捨てて、自分らのせいにされる。馬鹿げた話や。何とかしてほしいわ。」(男、50 代) 「アルミ缶の回収してる時、狭い道に置いてた自転車が車の邪魔になった。そんな時、運転手が自転車除けてくれと普通に言うんやのうて、ルンペン呼ばわりした。それで喧嘩になった。」(男、53 歳) 「バス停のベンチに座って、パン屋からパンの耳が捨てられるのを待ってた時、ばあさんに泥棒みたいに見られた。なんでそんな目でみるんや言うたら、このベンチに坐るな言われた、そんで喧嘩になりかけた。」(男、55 歳)

野宿者は、市民の差別に忍従しない。野宿者は、刻一刻、生の意味を模索している。だからこそプライドが強い。次は、予想される行政の強制撤去に対する心構えである(青木,2005:63-64)。

「月に1度公園の管理者の方が立ち退きを勧告してくるが、他に行くところもないし、とりあえずハイハイ言うてる。仕事がないうちは、ここに居続けるつもりや。」(男、44 歳) 「強制退去に応じる条件は、この公園の近くでテントが張れる場所を補償することや。」(男、55 歳) 「条件のいい仕事や宿泊施設を提供されても、移るつもりはない。撤去されても、別のところに暫く行って、すぐ戻ってくる。」(男、55 歳) 「景気が良くなれば、どうせここから出て行くんや。その前に強制退去なんか許されんことや。」(男、53 歳) 「団結して役所に抗議したい思うてる。みんなは、酒飲むで言わな集まらんけど。」(男、58 歳) 「テントが撤去されるようなことになったら、みんな暴れる

で。」(男、49 歳) 「家はここしかない。強制撤去されたら、仲間呼んで抵抗する。」(男、56 歳) 「そんな時は暴動を起こしたる。」(男、58 歳)

わしらも人間や。生きる値打ちあるんや。ここに、野宿者のぎりぎりの生の声を聞く。ならば、このような野宿者のもがきの叫びは、境遇の転倒をめざす<抵抗>にどのように転回するのだろうか(抵抗は、権力の問題を登場させる)。野宿者は、(支援者に導かれて)社会運動に起った。大阪の野宿者も、運動を始めた。運動に参加する野宿者は、(まだ)一握りである。しかしそれでも、運動は野宿者問題を可視化させ、政府を動かした。では、このポリティクスからなにが見えるのだろうか。答えは今は保留である。生活実践としてのもがきは、境遇解体の抵抗の土壌である。もがきの堆積なくして、抵抗が芽を吹くことはない。しかし、もがきは抵抗ではない。その転回点はどこにあるのだろうか。そこにどのような条件が介在するのだろうか。本稿は、この問いの手前で終らざるをえない。もがきから抵抗へ。それを架橋する論理を明かすこと、これが次の課題となる。

#### [注]

- (1) 日本で、ホームレスの呼称はいくつかある。本稿では呼称をめぐる議論に踏まえ、ホームレスのもっとも簡潔な用語である「野宿者」を用いる(青木,2000:99-105)。
- (2) 筆者が読んだ、新たな野宿者研究のトピックに、飯場労働の研究(渡辺,2005)、生活構造の研究(妻木,2003)、女性野宿者の研究(丸山,2004)(文,2004)、宗教的心性の研究(白波瀬,2005)などがある。この他、野宿者の排除や公共空間のポリティクスをめぐる議論も盛んである。
- (3) 筆者自身、2つの国際比較研究プロジェクト(「ロサンゼルス、パリ、サンパウロ、東京」と「台北、ソウル、東京」)に参加している。
- (4) 筆者は、1990年代以降のマニラでの調査や、2002年のサンパウロでの、2004年のワルシャワとプラハでの目視及び社会学者の話により、新しいホームレスの出現と増加を確認している。
- (5) これとは別に、筆者の手元に東京、神奈川、名古屋、大阪、広島、福岡の野宿者調査の報告書がある。野宿者の都市間比較は、興味深い課題である。比較により、都市ごとの野宿者の生活歴、野宿生活の実態、背景をなす労働市場、市民意識、行政施策などの特徴が明らかになる。
- (6) 大阪調査の資料、とくに聞き取りの原資料の使用を許可頂いた大阪市立大学環境問題研究会の方々に深謝する。
- (7) アメリカにおいてもホームレスの定義、発生原因、施策をめぐる論争が行なわれてきた(Levinson, 2004)。研究は概ね社会構造派と個人心理派に分かれるが、今、総合的な分析枠組みが模索されている。
- (8) 全国調査は、全体集計である。都市別では、野宿者の形態や条件の差異が推測される。残念にも、自治体別の集計結果は得られていない。
- (9) 大阪で、野宿者を収容できる施設の宿泊定員は、2005年1月に、3つの自立支援センター280人、2つの仮設一時避難所394人、福祉アパート(簡易宿泊所の借り上げ)2000室、社会福祉法人・自彊館の4つの救護・更生施設554人で、計3228人である(この他、

釜ヶ崎に1日泊りの臨時夜間緊急避難所1040人がある)。それらには、非野宿者が入所する施設もあるし、各施設の充足率も分からない。しかしそれらの施設に、相当の野宿者が入所している。とすると、大阪の野宿者が減少したと見るのは早計であろう。

- (10) 東京で、2005年1月に、社会福祉法による宿泊所3558人、自立支援システムの8寮928人、社会福祉法による8つの更生施設625人の、計5111人の野宿者が入所している(北川由紀彦氏の情報 2005年1月)。これを加えると、東京の野宿者は増加したといえる。
- (11) 日本の野宿者人口は多くないが、街頭の野宿者(street homeless)は、外国より多いと言われる。「世界中で路上にいる人の数からいけば、日本はずば抜けて多い」(岩田正美の発言、森田,2001:41)。とすれば、そこには2つの事情がある。一つ、日本の野宿者の定義が狭いためである。アメリカでは、一時的な同居人もホームレスにカウントしている。二つ、日本で、野宿者が入所できる施設が少ないためである。地方都市は全般に、野宿者(だけ)のための施設をもたない。
- (12) 東京の調査によれば、1999年に女性野宿者は15人で、全体の2.1%であった(都市生活研究会,1999:11)。
- (13) 日本の下層女性は、社会的に不可視な状態にある。彼女たちの存在は、サービス業(水商売)や施設、自宅(生活保護)に隠蔽されている。
- (14) 全国社会福祉協議会によれば、東京の救護施設などの施設に収容されている元野宿者は122人で、収容者全体の7.8%であった(丸山,2004:16)。
- (15) 女性野宿者には、野宿という苛酷な生活をしのぐため、男性と内縁関係をもって同居する者が多い。
- (16) 東京の男性野宿者の婚姻率は59.4%で、内、8.9%が妻と連絡を取っており、12.5%が妻と死別し、78.6%が離婚していた(都市生活研究会,1999:17)。
- (17) アメリカの市民対象のホームレス問題調査に、「あなたはかつてホームレスの生活をしましたことがありますか」という質問項目がある。このような質問は日本では考えられない。
- (18) 行政広報に載る行路病死者の年齢から推して、野宿者の平均寿命は、60歳代前半とも言われる。
- (19) 野宿者と生活保護の問題は、意味的にも実践的にも理論的にも、野宿者問題の重要な一部をなす。岩田正美(岩田,1999)をはじめ研究も多い。しかし、野宿者の仕事に焦点を置く本稿では、生活保護をめぐる諸問題の分析は割愛せざるをえない。
- (20)2003年、筆者は、東京・上野公園でテントを張り野宿する19歳(男)と17歳(女)の野宿者に会った。彼・彼女は、同棲し野宿して1ヶ月と語った。
- (21)同調査に基づく先行研究に(島,1999)(妻木,2001)(大倉,2003)がある。それらも適宜参照される。
- (22) それは、野宿者の意味世界の正確な再現ではない。そこには、野宿者の語りの調査者の解釈と、そのまた筆者の解釈という二重のバイアスがある。いかなる質的データの分析も、こうしたバイアスは免れない。桜井はこれを、生活史法における語り手と聞き手の相互的なリアリティ構築の問題として論じた(桜井,2002)。



- (23) 大阪調査では、父親の職業や家族構成など、出身家族の階層的地位については問われなかった。
- (24) 実際は親の収入が学歴を、学歴が職業選択の機会、つまり初職をダイレクトに決めるわけではない。しかしそこに、高い蓋然性のある因果関係みることができる。
- (25) 初職と直前職のデータは、報告書（大阪市大,2001:262）に、最長職のデータは、大阪調査の先行論文（妻木,2001:186）によった。ワーディングは一部変更した。
- (26) 一般に工員、とくに中小企業の工場で働く人々の定着率は低い。たとえばある鉄工関連の中企業で、若者 10 人が就職し、1 年後に残ったのは 3 人であった（大阪の若者の話, 2005.5.10）。なかには、職業訓練校を経て就職した者もいた。離職者のほとんどは「自己都合」の退職であるが、その背後には賃金・労働条件への不満があった。これが、中小企業の慢性的な労働力不足の実態である。
- (27) 西成労働福祉センター労働組合政策委員会によれば、釜ヶ崎に 4000～5000 人の常態的野宿者がいて、野宿とドヤを往来する労働者が 5000～6000 人いるという（白波瀬,2005:14）。
- (28) 日本社会では、それほどに野宿者差別が厳しい。行き斃れた家族の遺骨の引き取りさえ拒む家族も、少なくない。1998 年 9 月、東京・山谷での聞き取り。
- (29) 「エサ取り」は、コンビニで期限切れ食品を貰うなどの方法で食料を調達することをいう。食料を探す、炊出しの行列に並ぶなどの行為も、本来は立派な「仕事」ないし「労働」のはずである。仕事・労働概念の再構築が必要となっている。
- (30) 大阪市の清掃事業の主旨には、「近年の大幅な日雇い求人の減少により野宿生活者が急増し、深刻な社会問題となっていることから、市内各所の市有地の除草作業等の事業を拡充し、高齢日雇労働者の就労機会を創出し、自立生活を促進するとともに、市内各所の環境美化を図る」とある。大阪市のホームページより。2005 年 1 月  
[http://www.city.osaka.jp/shimin/shigoto/koyoushisaku/koyoushisaku\\_02\\_2.html](http://www.city.osaka.jp/shimin/shigoto/koyoushisaku/koyoushisaku_02_2.html)
- (31) 自立支援センターは、2000 年に、大淀（定員 100 人）、西成（定員 80 人）、淀川（定員 100 人）が開所された。2004 年 10 月時点で、延入所者数は大淀 680 人、西成 865 人、淀川 859 人であった。大阪市のホームページより。2005 年 1 月  
[http://www.city.osaka.jp/kenkoufukushi/sonota/sonota\\_20.html](http://www.city.osaka.jp/kenkoufukushi/sonota/sonota_20.html)
- (32) 釜ヶ崎でのセンター退所経験者の聞き取り。2004 年 8 月 14 日
- (33) 「自立支援センターおおよど」のホームページより。2005 年 1 月  
<http://www.ooyodo.jp/> 大阪市のホームページには次のようにある。「これまで、ホームレス自立支援センターの入所者に対する就職支援は、厳しい雇用情勢のなか、センターと公共職業安定所が協力して実施しており、就職率 40%の実績を上げています。しかしながら、最長 6 か月というセンターでの入所期間中に就職が決まらなかった場合は、居宅保護を受け、または家族のもとに戻るなど、安定した住居の確保を図らなければ、せつかくの自立への道も途絶え、路上生活にもどる恐れがあります。このため、センターにおける就職率の更なる向上を図ることが課題となっています。」
- (34) その数や割合は不明である。自立支援センターの実効性を測定するために、就労退所者の

追跡調査が重要課題となっている。

- (35) 建設仕事は減少していないのであって、日雇労働者や野宿者に仕事が回ってこないだけだ、という指摘がある(松繁,1997:107-120)。
- (36) 山口は、東京の野宿者を事例に、都市雑業としてのアルミ缶の回収と売買について、詳細な分析を行なっている(山口,2001a:141-151)。
- (37) 1995年の阪神淡路大震災の時、復興の土木工事に多くの日雇労働者が雇用された。全国から日雇労働者が集まり、大阪(釜ヶ崎)の労働者も被災地に殺到した。
- (38) 安全靴は、鉄筋の仕事をする時に履く。地下足袋は、鳶の仕事をする時に履く。運道靴は、内装や設備工事の仕事をする時に履く(渡辺,2005)。
- (39) 玉掛けとは、資材や荷をクレーンで吊り上げる際、ワイヤーをうまく吊り具に掛け、バランスをうまくとって、それらが崩れないようにする仕事をいう(渡辺,2005)。
- (40) 白手帳とは、雇用保険の日雇労働被保険者手帳をいう。表紙が白いのでこう呼ばれる。仕事に行くと、雇主が手帳に雇用保険印紙を1日1枚貼る。それが2ヶ月に26枚溜ると、3ヶ月目から保険金(1日7500円)が17日を限度に給付される。白手帳を登録するには、住民票を提出しなければならない。この野宿者も、かつてどこかに「住所」があったはずである。
- (41) 大阪市が毎年12月28日~1月4日、越年対策で南港に日雇労働者を収容する臨時宿泊所のこと。
- (42) 額田は、阪神淡路大震災で仮設住宅に住む被災孤老の死を分析し、こうした人間の精神状態を「緩慢な自殺」と呼んだ(額田,1999:114,185)。青木も、野宿者の死の意味の類型的な分析を試みた(青木,2006)。ところで、このような野宿者の生(死)と強制収容所のユダヤ人の生(死)を束ねて、「剥き出しの生」(Agamben,1996=2000:72)と呼ぶ者もいる(渋谷,2003:204-209)。しかし、その意図は「排除」の極値を強調することにあるにせよ、野宿者とユダヤ人を並列して論じることには、違和感を覚える。一般的例示には、個別の事例の意味を希釈化する危険がある。
- (43) 排除社会論から野宿者を論じる研究(たとえば西澤,2005)があるが、それには、人間の服従から抵抗への反転の内的論理の説明に乏しい。抑圧された人々はどのように服従から抵抗へ転回するのだろうか。本稿は、その可能性の一つの模索である。
- (44) 類似の概念として、桜井は、被差別部落民の生活の技法を「生活戦略」と呼んだ(桜井,2005:37)。
- (45) ラーフゲン(Lerfgen,J.)とスノウ(Snow,D.A.)は、ホームレスの街頭出し抜き戦略から、他者からの距離化(distancing)、他者の包含(embracement)、作り話語り(fictive storytelling)という3つの関係構築の手法を抽出した(Livingston,2004:554)。アンダーソン(Anderson,E.)は、ある都市コミュニティを舞台に、街頭生活を渡り歩く知恵に長けた、ストリート・ワイズ(street wise)な人々の世界を描いた(Anderson,E.,1990)。

## [文献]

- 青木秀男,2000『現代日本の都市下層—寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店
- 青木秀男,2003「新労務層と新貧困層—マニラを事例に」日本寄せ場学会『寄せ場』16号 110-129頁
- 青木秀男,2005「どこ行けいんや！—公園野宿者の占居と排除」日本都市社会学会『日本都市社会学会年報』23号 57-73頁
- 青木秀男,2006「彷徨する野宿者—自死と抵抗の間」大阪市立大学共生社会研究会『共生社会研究』1号 3-12頁
- 岩田正美,1995『戦後社会福祉の展開と大都市最底辺』ミネルバ書房
- 大倉祐二,2003「野宿生活者の職業遍歴」大阪市立大学社会学研究会『市大社会学』4号 81-91頁
- 大阪市,2005.1 ホームページより。  
[http://www.city.osaka.jp/shimin/shigoto/koyoushisaku/koyo\\_01\\_08.html](http://www.city.osaka.jp/shimin/shigoto/koyoushisaku/koyo_01_08.html)
- 大阪市大、大阪市立大学都市環境問題研究室,2001『野宿生活者（ホームレス）に関する総合的調査研究報告書』
- 基礎生活、基礎生活保障問題研究会,2002『名古屋市「ホームレス」聞き取り調査等に関する最終報告書』
- 厚生労働省,2003『ホームレスの実態に関する全国調査報告』同ホームページより  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/03/h0326-5.html> (2005年1月)
- 桜井厚,2002『インタビューの社会学—ライフヒストリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚,2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房
- 渋谷望,2003『魂の労働—ネオリベリズムの権力論』青土社
- 総務省統計局,2000『平成12年度 国勢調査速報』同ホームページより  
<http://www.stat.go.jp/kokusei/2000/sokuhou/10htm> (2005年1月)
- 島和博,1999『現代日本の野宿生活者』学文社
- 白波瀬達也,2005「宗教の寄せ場、釜ヶ崎」関西学院大学大学院社会学科 2004年度修士論文
- 妻木進吾,2001「野宿生活の構造的把握—野宿生活の維持は、いかにして『選択』されるのだろうか」(大阪市立大学文学研究科社会学専攻修士論文)
- 妻木進吾,2003「野宿生活：『社会性渴の拒否』という選択」社会学研究会『ソシオロジ』147号 21-37頁
- 特別区人事・厚生事務組合,2003『緊急一時保護センター大田寮利用者実態調査』
- 都市生活研究会,1999『平成11年度 路上生活者実態調査』
- 西澤晃彦,2005,「檻のない牢獄—野宿者の社会的世界」岩田正美・西澤晃彦編著『貧困と社会的排除—福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房 263-284頁
- 額田勲,1999『孤独死—被災地で考える人間の復興』岩波書店
- 松繁逸夫,1997「釜ヶ崎日雇労働者と閑空工事」島和博他「関西国際空港工事に従事した建設労働者の雇用構成に関する試行分析」大阪市立大学文学部紀要『人文研究』49巻 11分冊

- 丸山里美,2004「ホームレスとジェンダーの社会学—女性ホームレスの日常実践から」京都大学大学院文学研究科社会学修士論文 1-54 頁
- 文貞実,2004「『寄せ場』の変容と女性野宿者」田巻松雄編『現代日本社会に於ける寄せ場の実態』（文部科学省）科学研究費補助金研究成果報告書 42-56 頁
- 森田洋司編,2001「座談会 野宿者とはだれか」『落層—野宿に生きる』日経大阪 PR 企画 21-79 頁
- 山口恵子,2001a「現代社会における都市雑業の展開—新宿、隅田川周辺地域の事例より」広島修道大学人文学会『広島修大論集』（人文編）42 巻 1 号 129-152 頁
- 山口恵子,2001b「野宿者の生き抜き戦略—野宿者間の相互作用を中心として」田巻松雄代表『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』（平成 7 年度～8 年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)成果報告書）107-125 頁
- 渡辺拓也,2005「人夫出し飯場のエスノグラフィー」大阪市立大学大学院文学研究科 2004 年度修士論文
- Agamben, Giorgio, 1996, *Mezzisenza Fine*, Bollati Boringhieri, 高桑和己訳, 2000『人権の彼方に』以文社
- Anderson, Elijah, 1990, *Street Life; Race, Class, and Change in an Urban Community*, University of Chicago Press, 奥田道大・奥田啓子訳, 2003『ストリート・ワイズ—人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード』ハーベスト社
- Hardt, Michael, Antonio Negri, 2000, *Empire*, Harvard University Press, 水嶋一憲他訳, 2003『帝国—グローバル文化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社
- Levinson, D. (ed), 2004, *Encyclopedia of Homelessness*, Sage Publisher, Inc.
- National Coalition for Homeless, 2001.6, *NCH Fact Sheet*, #7.